

奈良県の地震

【奈良県の地震活動図】

震央分布図と断面図

【奈良県地震概況】

【地震一口メモ】

中央構造線断層帯の長期評価の見直しについて

「奈良県の地震」は、奈良地方気象台における地震調査の一環として県内の地震活動状況を的確に把握し、きめ細かい防災対策に資するため1989年1月より月1回発行しています。「奈良県の地震」は、上記の項目で構成し、適宜地震解説資料や用語解説等を掲載します。

※本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

※震度データは、気象庁の震度計の観測データに併せて地方公共団体、及び国立研究開発法人防災科学技術研究所から提供されたものを掲載しています。

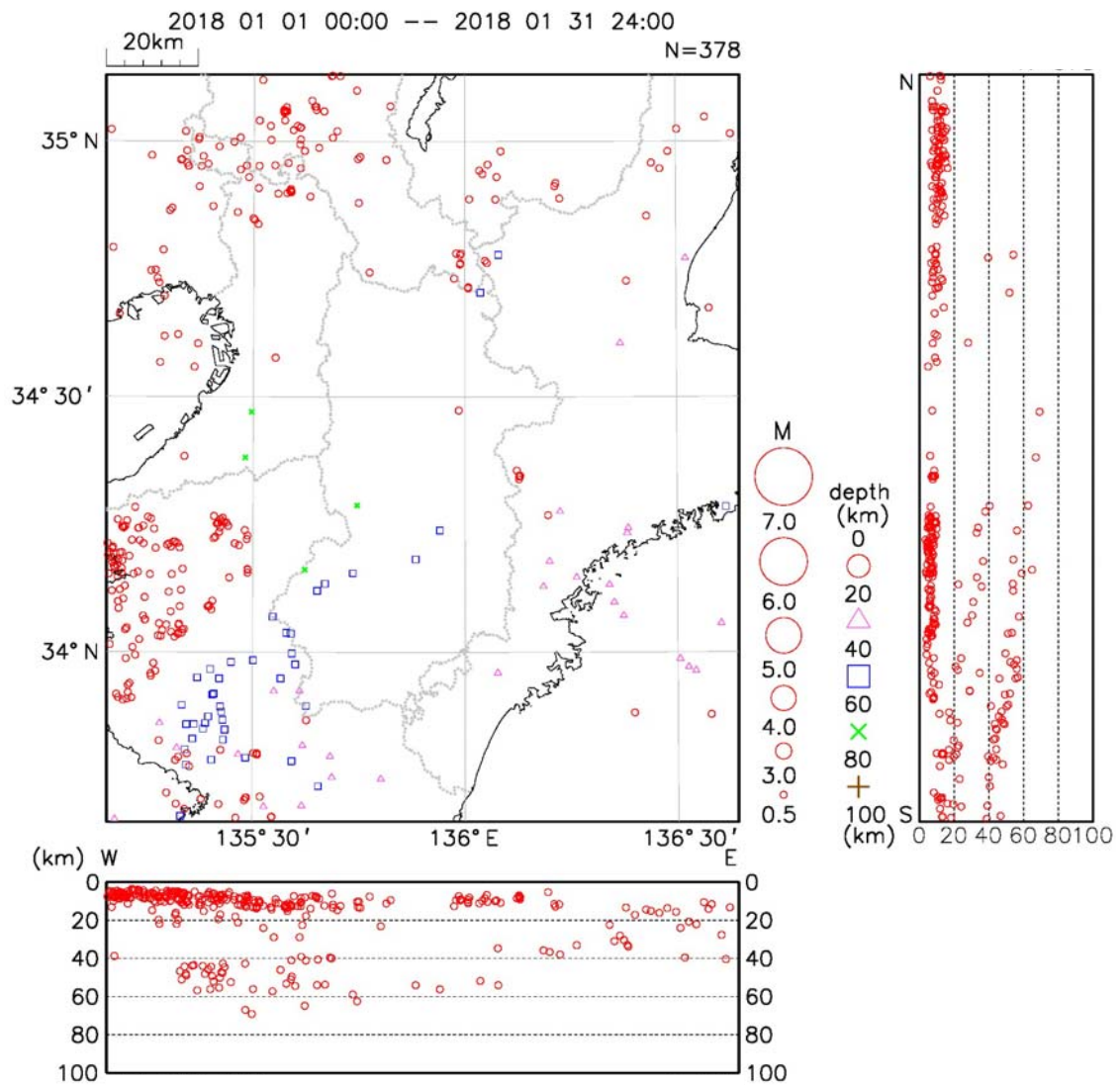
※この資料の震源要素及び震度データは、再調査されたあと修正されることがあります。

奈良地方気象台
2018年1月

【奈良県の地震活動図】

震央分布図と断面図

地図範囲内に分布している震央の南北方向の断面図(右上)と、東西方向の断面図(左下)で、地震の垂直分布を表しています。これにより、マグニチュード(M)の大きさと深さによる地震発生状況が把握しやすくなります。



【奈良県地震概況】

奈良県内で1月に震度1以上を観測した地震はありませんでした。

【地震一口メモ】

～中央構造線断層帯の長期評価の見直しについて～

地震調査研究推進本部は、平成23年2月に中央構造線断層帯の長期評価を発表しましたが、今般、中央構造線断層帯の再調査結果より、新たな知見が得られたことから再評価を行い、平成29年12月19日に『中央構造線断層帯(金剛山地東縁-由布院)の長期評価(第二版)』を公表しました。今回の公表資料では、金剛山地東縁から大分県由布市付近までの全区間について見直されています。本紙では、奈良県に影響があると考えられる活断層を抜粋し紹介します。

平成25年から27年度にかけて、関係研究機関等において中央構造線断層帯の重点調査観測が行なわれました。この結果より、活動履歴データ等が蓄積したことから、活動区間・活動度を再整理した結果、活動区間・活動度を再整理した結果、活動区間は、これまで『和泉山脈南縁』としていた区間は『五条谷区間』と『根来区間』に区分し、『金剛山地東縁区間』の南端は、断層の走行が南北から東西に変わる屈曲部付近までとし、屈曲部以西は『五条谷区間』になりました(図参照)。活動度は、『金剛山地東縁区間』は平均活動間隔が6から7千年、『根来区間』は2.5から3千年に変更。『五条谷区間』は不明とされました。加えて、表に示すとおり、発生確率等が変更されています。より詳細な事項については、下記の資料を参照して下さい。

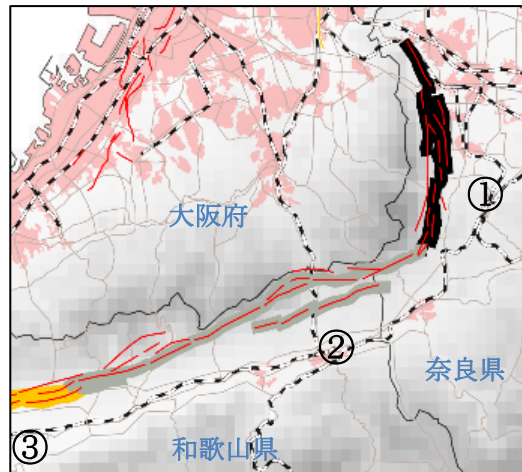


図 断層の活動区間
番号は表に示す区間名に対応
(地震調査研究推進本部発表資料を編修)

URL http://www.jishin.go.jp/main/chousa/17dec_chi_shikoku/shikoku_01_mtl.pdf

表 奈良県に影響があると考えられる中央構造線断層帯の活断層

区間	断層長 (km)	予想した地震規模(M)	発生確率のランク・色	評価改訂の理由
① 金剛山地東縁	約 16	6.8	Z	2回の活動履歴から平均活動間隔の推定幅の大幅な向上
② 五条谷	約 29	7.3	X	最新活動時期の推定幅の向上、根来区間と異なる活動時期
③ 根来	約 27	7.2	A	複数の活動履歴から平均活動間隔の推定幅の向上、構成断層の変更

発生確率の凡例

色	ランク	解説
赤	Sランク(高い)	30年以内の地震発生確率が3%以上
黄	Aランク(やや高い)	30年以内の地震発生確率が0.1~3%
黒	Zランク(-)	30年以内の地震発生確率が0.1%未満
白	Xランク(-)	地震発生確率が不明(すぐに地震がおこることが否定できない)

地震後経過率が0.7以上である活断層については、ランクに*を付記する